

## 6 ステージ D2 前立腺癌の予後因子

斎藤 俊弘・原 昇・北村 康男  
小松原秀一

県立がんセンター新潟病院泌尿器科

【目的】ステージ D2 前立腺癌の治療成績およびその予後因子について検討する。

【対象と方法】1992 年～2003 年に当科で治療したステージ D2 前立腺癌新鮮例のうち組織学的に腺癌の診断が得られていた 175 例を対象とし、年齢、PS, Hb, Plt, ALP, LDH, 治療前 PSA, T 分類, N 分類, EOD, 分化度, (初期治療としての) MAB や化学療法の有無などの予後規定因子について retrospective な検討を行った。

【結果・考察】全症例の 5 年生存率は 34.8%, 疾患特異的 5 年生存率は 41.7% であった。単変量解析では Hb, Plt, ALP, LDH, 治療年代, T 分類, 化学療法の有無で予後に有意な差を認めた。多変量解析では治療年代, PSA, 化学療法の有無で予後に有意な差を認めた。

【結論】ステージ D2 前立腺癌の治療成績向上のための戦略の 1 つとして初期治療としての内分泌化学療法の有用性が示唆された。

## 7 ホルモン依存性前立腺癌細胞 LNCaP における副腎由来 androgen 代謝に対する考察

鈴木 一也・西山 勉・原 昇  
山名 一寿・Vladimir Bilim・糸井 俊之  
丸山 亮・高橋 公太

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
腎泌尿器病態学分野

【目的】ホルモン依存性前立腺癌細胞株 LNCaP を用いて前立腺癌内 androgen 代謝機構につき検討した。

【方法】LNCaP を各濃度 0.1–10nM の DHT, testosterone, androstendione, dehydroepiandrosterone (DHEA), 濃度 0.1nM–1 $\mu$ M の OH–flutamide を加えた medium で培養し、培養上清中の PSA を RIA 固相法にて測定、androgens の PSA 産出に対する効果をみた。また、それぞれの 10nM 添加液 (OH–flutamide は 1 $\mu$ M) に濃度 0.1–10 $\mu$ M の

finasteride を加え、PSA 産出抑制効果も合わせて測定した。

【結果】DHT, testosterone, androstendione, DHEA, OH–flutamide 添加により、それぞれ濃度依存的に PSA 産出が増加した。濃度 1 $\mu$ M の finasteride 添加によって、testosterone, androstendione, DHEA による PSA 産出が抑制されたのに対して、DHT, OH–flutamide では産出は抑制されなかった。

【結論】再燃癌モデルの LNCaP において副腎由来 androgens は直接癌細胞に作用するのではなく、細胞内で DHT に代謝された後、前立腺癌増殖に関与すると考えられた。去勢+anti-androgen のいわゆる Complete Androgen Blockade に、副腎由来 androgens の DHT への代謝抑制を加えることで再燃癌においても癌進展抑制効果を得られる可能性が示唆された。

## 8 転移性脳腫瘍に対する新型ガンマナイフ・モデル C の有用性について

佐藤 光弥・森井 研・秋山 克彦  
五十川瑞穂\*

北日本脳神経外科病院脳神経外科  
新潟大学脳研究所脳神経外科\*

転移性脳腫瘍に対するガンマナイフ治療は、医学的な禁忌がほとんどなく、開頭手術や全脳照射に比べて患者の負担が少なく、原発巣に対する治療に悪影響を及ぼすこともなく、QOL の点からも第 1 選択となることを第 63 回の本研究会で報告した。1997 年 10 月から 2005 年 3 月 22 日まで 1,800 例のガンマナイフ治療を経験したが、そのうち転移性脳腫瘍は 1,164 例で 64.7% を占める。2003 年 8 月に新型ガンマナイフ・モデル C を導入してからの 522 例では、転移性脳腫瘍は 389 例 (74.5%) であった。モデル C には、コンピュータ制御により自動で頭部の位置の変換が行えるオートマチック・ポジショニング・システム (APS) が搭載されており、治療時間の短縮だけでなく、副作用を軽減して治療効果も高める照射計画を立てることができるようになった。つまり腫瘍自体